パンのある幸せな食卓を 106

自然と共存って…

文 木村安兵衛
text by Yasube Kimura

先日長崎県で狩猟集団を束ねている方とお話をしました。以前からの仲間であるにも関わらず、東京・長崎の距離は遠くなかなか顔を合わせての対談というわけにはなりませんでした。

野生動物の食害から話は発展して、里山の整備と野生動物との共生に話が及びました。環境保護活動をされている方々からは、「里山を整備しなくなったので、動物の世界と人間の世界の境目がなくなってしまった。よって人間界に野生動物が出やすい環境になってしまった」という話をよく伺っていましたが、ここで私は自問自答することとなりました。

近年、里山を整備するためには間伐材を利用する必要があります。寛容に配慮するといってマイ箸を持ち歩く意識高い系の人々が出てきました。まずこれで里山の整備ができるのでしょうか？ さらに里山を整備すると動物は来なくなるのでしょうか？ 答えはノーであります。

林業で木を伐採した後の禿斜面のことを「切り跡」と呼んでおります。切り跡には鹿が出没することが多いので、狩猟の際には明け方に回ることが多くなります。間伐で間引きされた林でも、頻繁に鹿に出会います。これは木が間引きされたことによって、鹿は角が引っかからなくなり通りやすくなるためです。また下草も刈られることにより、日光も入りやすくなり新芽が生えやすくなります。

新しい草は柔らかく、草食動物にはごちそうになるのであります。これでは里山整備は動物を呼んでしまうことになります。そこで人里まで出てこないように猟師の仕事が始まるということになります。

これでは野生動物と人間の共存はできないのではないかという議論になりかねないのですが、私はこの段階で共生ができているのではないかと考えております。つまり鹿は人間界近くの里山や切り跡に近づくと殺されてしまう。しかし美味しくて栄養豊富な草が生えている。殺されることを覚悟して柔らかい下草を食べることによって、繁殖期までにライバルに差をつけたい、ということになっているのではないでしょうか？

動物との共生ということを考えると絵本のように動物と人間が手を取り合って笑顔で生きている風景を想像します。しかし現実にはウサギさんとキツネさんは手をつないでダンスは踊りません。同じように鹿と人間も笑顔で触れ合っているのは動物園と奈良ぐらいであります。生死をかけてでもお互いに利用しあう関係が共存ということになるのであろうと考えております。

我々人間は保護と管理という観点で、もっと真面目に自然と接しても良いのではないか？と考えることになったのでした。

Profile

1969年生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、千代田生命保険相互会社に入社。その後アメリカで唯一のFDA（米国食品医薬品局）研究機関である米国立製パン研究所へ留学、ベーキングサイエンスを研究する。ニューヨーク、フランスにて修業を積んだ後、その腕前と経営センスを見込まれ、エリック・カイザーの在日パートナーとして、2000年に株式会社ブーランジェリーエリックカイザージャポンを設立。2001年メゾンカイザー1号店として東京・高輪に店舗をオープンし、2021年3月末時点31店舗を数える。